

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会(第 58 回)

日時：令和 6 年 1 月 16 日 (火) 10:00～11:30

場所：KKRホテル名古屋 3 階 芙蓉の間

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事

(1) 水堀関連遺構の発掘調査について <資料 1>

(2) 特別史跡名古屋城跡内での石垣カルテ作成について <資料 2>

4 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会（第58回）

出席者名簿

日時：令和6年1月16日（火）10:00～11:30

場所：KKRホテル名古屋3階 芙蓉の間

■構成員

（敬称略）

氏名	所属	備考
北垣 聰一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
赤羽 一郎	前名古屋市文化財調査委員会委員長 元愛知淑徳大学非常勤講師	副座長
宮武 正登	佐賀大学教授	
西形 達明	関西大学名誉教授	
梶原 義実	名古屋大学大学院教授	

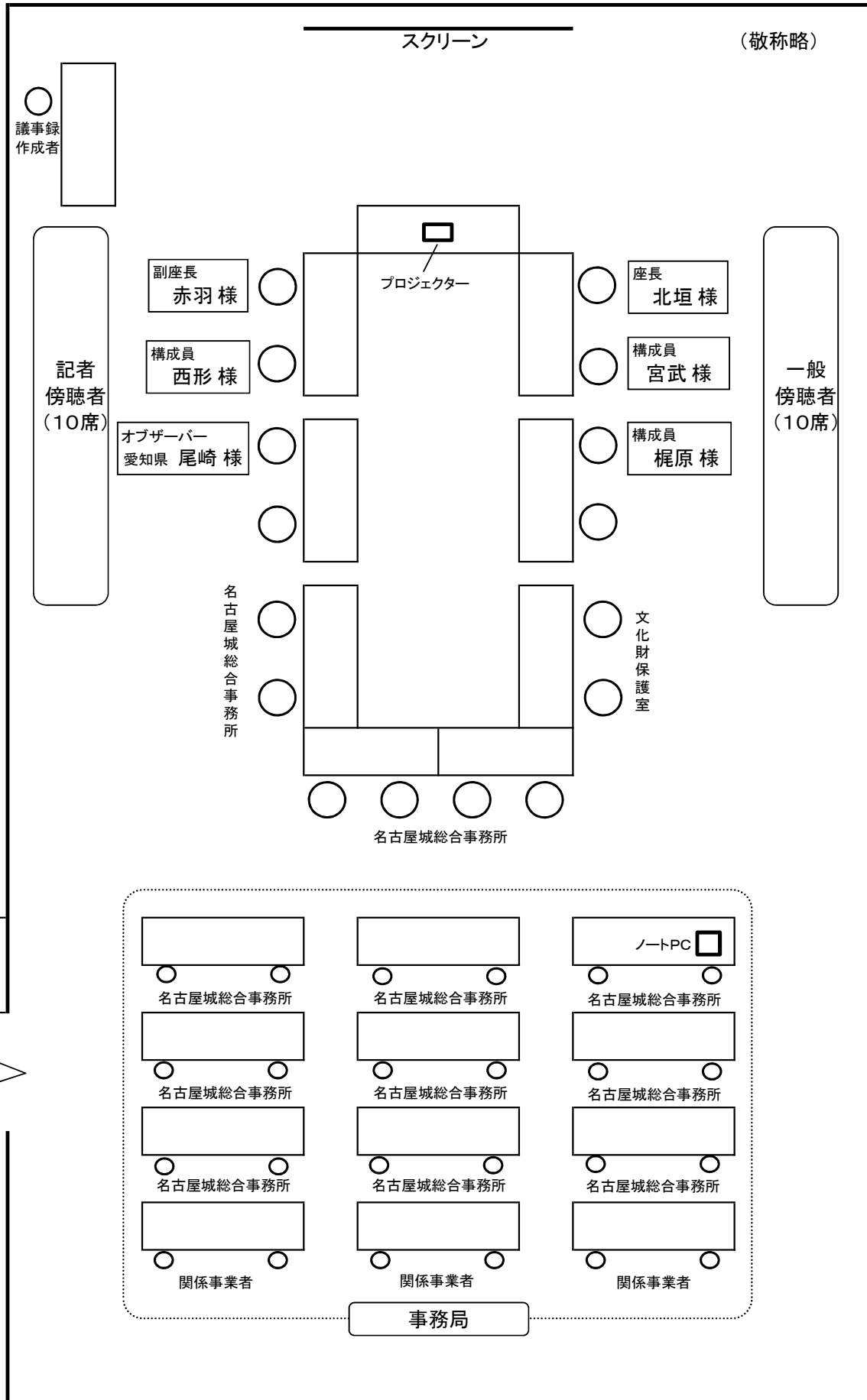
■オブザーバー

（敬称略）

氏名	所属
渋谷 啓一 （リモート）	文化庁文化財第二課主任文化財調査官
中井 將胤 （リモート）	文化庁文化資源活用課整備部門（記念物）文化財調査官
尾崎 綾亮	愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室

座席表

令和6年1月16日(火)
10:00~11:30
KKRホテル名古屋 芙蓉の間



水堀関連遺構の発掘調査について

1. 発掘調査の方針

辰之口などの現存する遺構においては、発掘調査について検討、実施する。また、残存状況が把握できていない遺構については、文献等の史料調査をすすめるとともに、発掘調査の可能性を検討する。（参考2 第57回全体整備検討会議資料より）

2. 辰之口の発掘調査

(1) 調査の目的

- 水堀の排水施設として設置された辰之口水道大樋は、現在も排水部分の石組等が確認できる。当該地点を発掘・清掃することで側面の石組の設置・改修の状況や底面の「南蛮た々き」（『金城温古録』御深井御庭編之四、以下「タタキ」とする）施工法・標高等を把握し、保存・活用をする上で必要な情報を得る。

- 平成10年（1998）の護岸工事の際の記録写真では、辰之口水道底面のタタキが埋立地部分まで広がっている様子が確認できる（図3）。埋立地を発掘調査することによりタタキを含めた遺構の残存状況について把握する。

(2) 調査区の位置・面積

- 辰之口水道の排水部分（14㎡）と辰之口の東側に面して設置された埋立地部分（42㎡）の計56㎡を調査。

(3) 調査の方法

- 埋立地のコンクリートを撤去した後は人力で掘削・清掃を行う。
- 掘削深度は、近世遺構面までを原則とするが、遺構の時期・性格等を確認するために必要最小限の断ち割り調査を行う場合がある。
- 埋め戻し方法については、遺構の検出状況を勘案し、有識者の意見を聞いて決める。

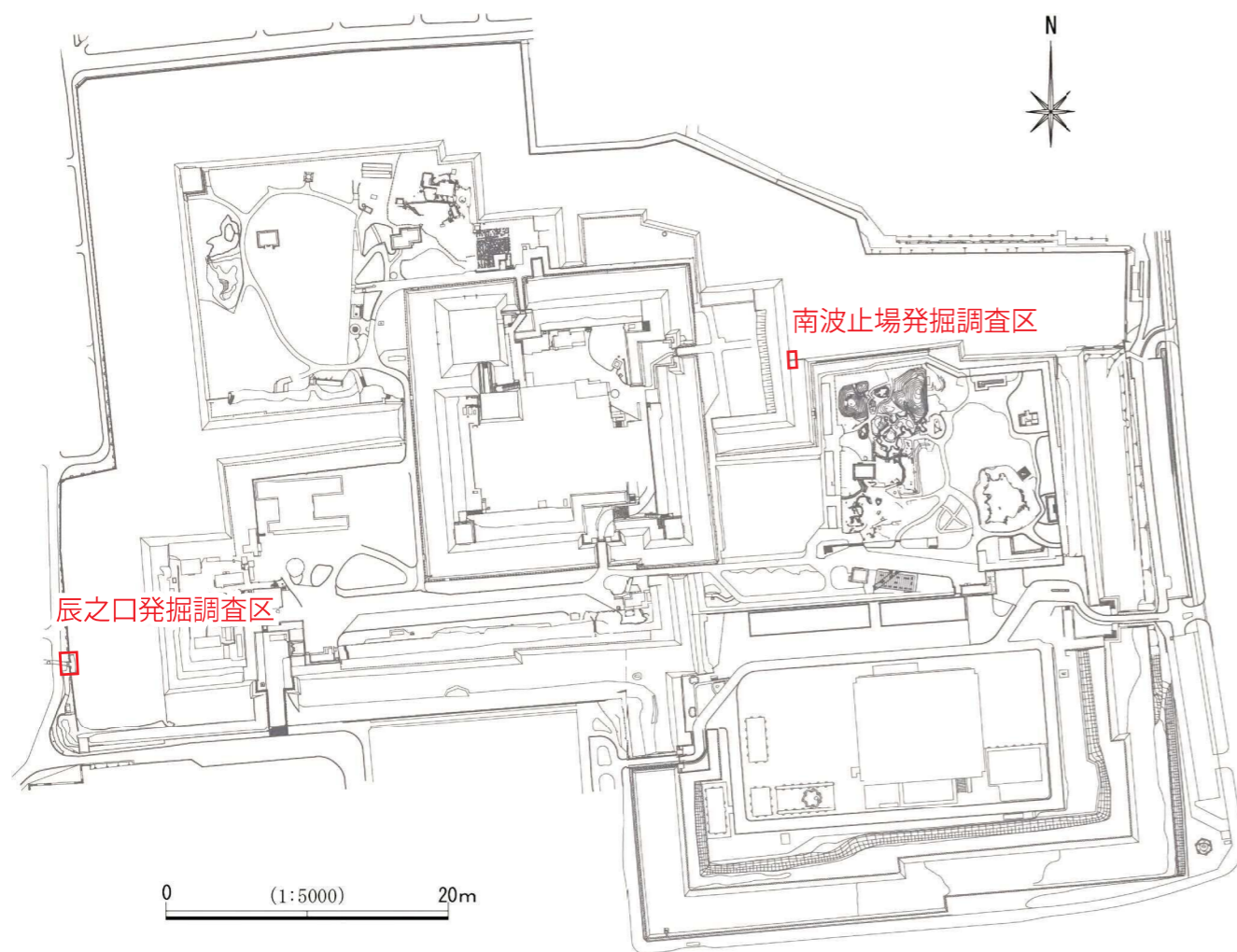


図1 発掘調査の位置

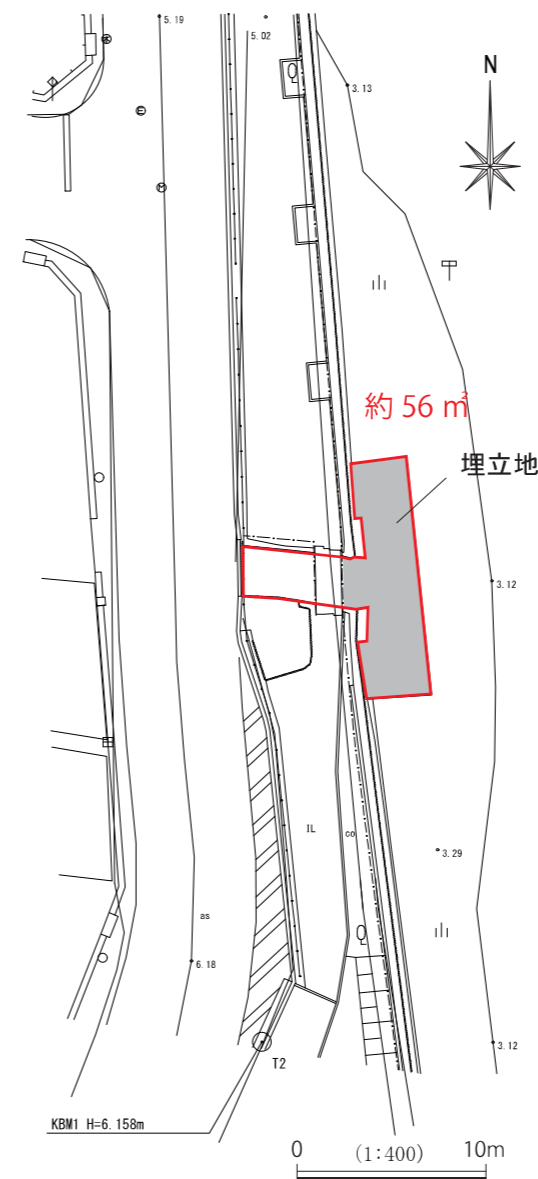


図2 辰之口調査区の位置 ※赤枠が調査区



図3 辰之口付近のタタキ



図4 辰之口水道の排水部分（東から）



図5 辰之口に面する埋立地（北西から）

3. 南波止場の発掘調査

(1) 調査の目的

・本丸搦手馬出と二之丸の間の堀には、南波止場の一部と推定される石組が現況で二段分確認できる(図10)。発掘調査により、石組遺構の段数・搦手馬出石垣との関係、石組の北側に確認される石材との関係等を確認し、南波止場の構造や遺構の残存状況等について把握し、保存・活用していく上での基礎的な情報を得る。

(2) 調査区の位置・面積

・搦手馬出石垣と仮設通路の間の東西幅4m、南波止場の石組み遺構を中心に南北10mの調査区(計40㎡)を設定。

(3) 調査の方法

・人力での掘削を基本とする。調査区内に点在する石材が遺構と無関係なことが判明し、移動が必要な場合は重機を使用する。
・調査中はポンプを稼働させ、排水を行いながら調査を行う。
・掘削深度は、南波止場の近世遺構面までを原則とするが、遺構の時期・性格等を確認するために必要最小限の断ち割り調査を行う場合がある。



図9 発掘調査区近景(南から)※赤枠が調査区



図10 南波止場の石組み(北から)

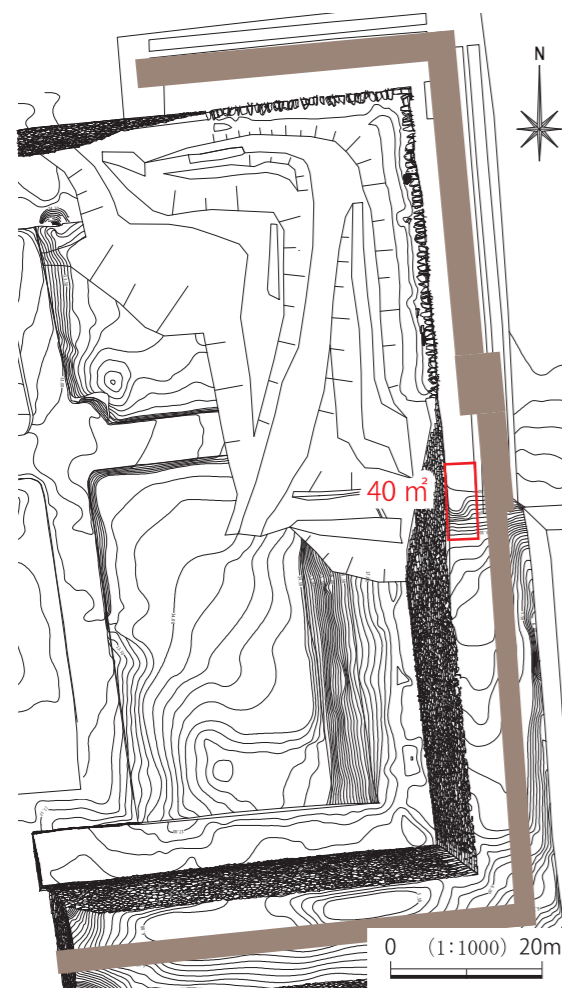


図6 南波止場の発掘調査区 ※赤枠が調査区



図7 発掘調査区遠景(北東から)※赤枠が調査区



図8 発掘調査区近景(北東から)※赤枠が調査区

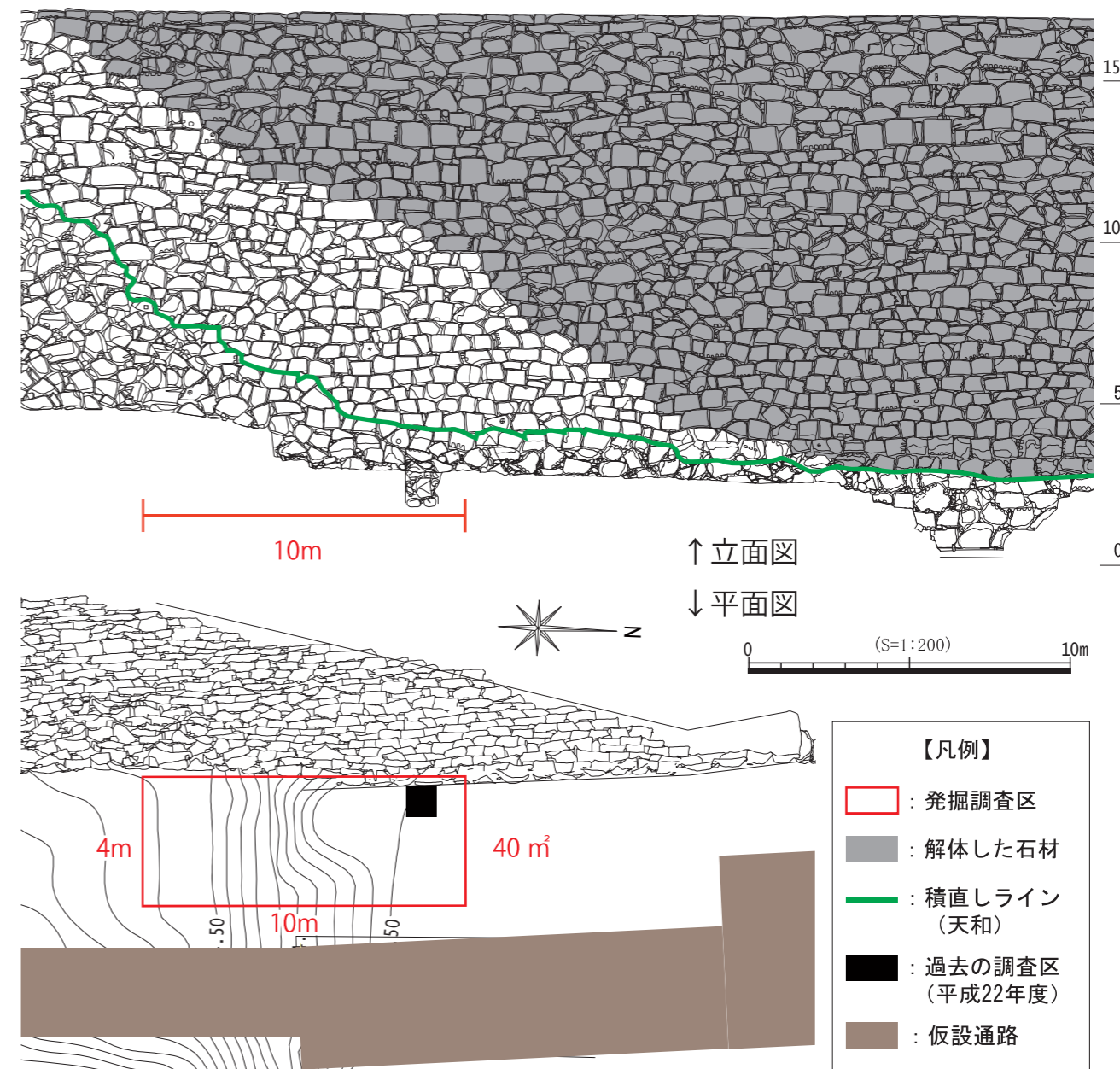


図11 搦手馬出石垣と南波止場発掘調査区(上:立面図、下:平面図)

水堀における舟運についてのこれまでの経緯

水堀における舟運について、これまでの検討状況は以下のとおり。

年 度	内 容
令和 3 年度	≪ 第 47 回全体整備検討会議（3 月） ≫ ・ 水堀における舟運事業概要
令和 4 年度	≪ 第 49 回全体整備検討会議（5 月） ≫ ≪ 第 49 回石垣・埋蔵文化財部会（5 月） ≫ ・ 水堀の概要：近世の水堀の状況、船着場候補地周辺の遺構、水堀の現況など ・ 水堀における舟運の概要：内容、運航経路案など ・ ボーリング調査：調査場所、概要 ≪ 第 50 回石垣・埋蔵文化財部会（7 月） ≫ ≪ 第 51 回全体整備検討会議（8 月） ≫ ・ 水堀における舟運の概要：趣旨、内容（案） ・ ボーリング調査：目的、調査場所、概要 < ボーリング調査 > ・ 現状変更許可（9 月） ・ 調査実施（1 月）
令和 5 年度	≪ 第 57 回全体整備検討会議（10 月） ≫ ・ 概要、今後の進め方 ≪ 第 58 回全体整備検討会議（12 月） ≫ ・ 水堀関連遺構の発掘調査 ・ 舟運事業の社会実験の概要案

水堀の活用（舟運）について

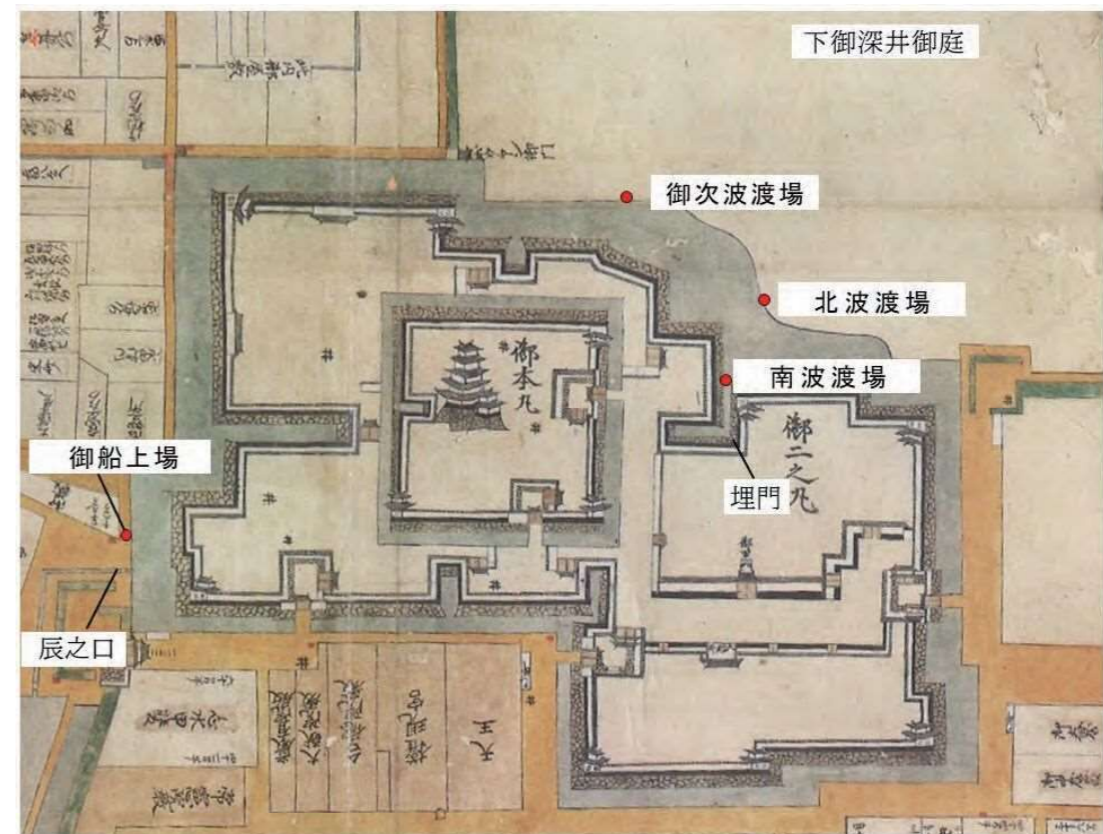
1 水堀の活用（舟運）の概要

(1) 趣旨

- ・近世期の城郭では、広大な面積を有し、高石垣を備える水堀が多く見られる。こうした水堀は、遊興の空間、物流や交通、城下町の治水、貯水池など、防御以外にも多面的な機能を有しており、水堀に光をあてることを通じて、新たな視点から城郭の魅力や意義を伝えることが可能となる。
- ・名古屋城の水堀は築城当時の姿をほぼ留め、水堀に関連する江戸期の遺構（以下、「水堀関連遺構」という。）も残存している。水堀には高石垣がめぐり、その上にはかつて月見櫓等の諸施設が、北側には下御深井御庭が広がるなど、一体的な空間を構成していた。現在でも、水堀の水面からは、10mを超える高さの石垣や重要文化財の西北隅櫓を臨むことができる。
- ・江戸時代の名古屋城の水堀は、舟の運航をはじめとしてさまざまな場面で活用されていた。引き続き、水堀及び水堀関連遺構（以下、「水堀等」という。）について文献等の史料調査をはじめとした総合的な調査を進めるとともに、このような歴史的事実をふまえた舟を運航することで、水堀等への理解促進や文化財保護意識の向上、名古屋城の魅力向上を図る。

(2) 名古屋城水堀の概要

- ・名古屋城の水堀は、城郭の北側（御深井丸及び二之丸）及び西側（御深井丸及び西之丸）に広がり、「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」において名古屋城の本質的価値を構成する諸要素の一つに位置付けられている。
- ・御深井丸及び西之丸の周囲の水堀は、名古屋城普請が開始された慶長 15 年（1610）、堀・石垣と同時期に完成したと考えられる。当初、北岸の東側部分（二之丸北側）は護岸がなされず、自然湧水の御蓮池と水面がつながっていた。その後、湧水の減少を補うため、庄内川から御用水が引かれ、排水施設として寛文 3 年（1663）には辰之口が設置された。
- ・江戸時代には、下御深井御庭での遊興の際の往復や上使の接待、藩主の巡行の際の経路としての利用や、非常時の脱出経路としての位置付けなど、さまざまな場面で水堀が活用され、舟が運航されていた。舟運に関連する施設としては、南波渡場、北波渡場、御次波渡場、御船蔵などが水堀に面して存在していた。



<凡例> ● 舟運関連施設（※御船蔵は未記載）

図 1 舟運関連施設位置図(『尾府名古屋図』(名古屋市蓬左文庫蔵)に一部加筆)

(3) 課題

- ・水堀関連遺構について、位置や残存状況等が十分に把握できておらず、総合的な調査を行う必要がある。
- ・水堀等の理解促進を目的とした舟運について、水堀等の現況などをふまえ、どのような運航が可能か検討する必要がある。

<参考文献等>

- 『金城温古録』(名古屋市蓬左文庫発行「名古屋叢書続編」所収)
- 『御小納戸日記』(徳川林政史研究所蔵)、『尾張名所図会』、
- 正保 4 年(1647) 名古屋城図 (徳川美術館蔵)
- 正徳 4 年(1714) 尾府名古屋図 (名古屋市蓬左文庫蔵)
- 文政元年(1818) 名古屋城下図 (名古屋市博物館蔵)

2 今後の進め方

(1) 現状と当面の方向性

< 調査研究等 >

現状

- ・遺構が現存する南波渡場周辺では、搦手馬出周辺石垣の積み直し工事に着手しており、発掘調査を行う時期等について検討が必要。
- ・水堀に面して存在した北波渡場、御次波渡場、御船蔵などは、現在視認できる形で遺構は残っておらず、遺構の位置や地下遺構の残存の有無等は判明していない。

方向性

- ・辰之口などの現存する遺構においては、発掘調査について検討、実施する。また、残存状況が把握できていない遺構については、文献等の史料調査をすすめるとともに、発掘調査の可能性を検討する。
- ・水堀等に対する理解促進、文化財保護意識の向上を図るため、事業の進捗にあわせて、市民を対象とした講演会、シンポジウム、発掘調査現地説明会などを適宜実施する。

< 舟運事業 >

現状

- ・水堀の排水施設であった辰之口には遺構が現存しており、観覧できる状態にある。また、辰之口の東側には、平成 10（1998）年度に実施された護岸改修工事の際に埋立地が設置され、残存している。
- ・石垣付近等の浅瀬において堀底に転石などがある可能性があり、舟の運航に必要な水深を確保できる場所が正確に把握できていない。なお、搦手馬出周辺石垣の積み直し工事に伴い水堀の水位を下げていることから、当面の間水堀の北東側では舟を運航するために必要な水深が確保できない。

方向性

- ・当面は、主に水堀の西北側エリアを運航する舟運事業を検討するための社会実験を行い、必要な船着場の仕様や具体的な運航経路等を調査する。それらの結果に加え調査研究等の成果も含めた事業計画を取りまとめる。なお、船着場については、史跡や堀底への影響を最低限に留めた整備となるよう、辰之口の東側に位置する埋立地を候補地として活用を検討する。

- ・将来的には、調査等の成果をふまえ、往時の船着場の再現も視野に入れながら、水堀の北東側を含めた運航エリアの拡張等、さらなる充実に向け検討を行う。

表 1 当面の想定スケジュール

年度		令和 5 年度 (2023年度)	令和 6 年度 (2024年度)	令和 7 年度 (2025年度)	令和 8 年度以降 (2026年度以降)
調査研究等	水堀関連遺構の 文献等の史料調査			→	
	水堀関連遺構の 発掘調査				→
	水堀等に関する シンポジウム等		適宜実施	→	
舟運事業	舟運に関する 計画作成等		計画の取りまとめ ★社会実験	→	★運航開始
	運航エリア拡張等 の検討				→



図 2 埋立地（北側から撮影）



図 3 埋立地（東側から撮影）

< 辰之口東側に位置する埋立地 >
平成 10（1998）年度に実施された外掘護岸改修工事の際に設置された（幅 12.5m×奥行き 2.5m）。鋼矢板（長さ：4 m）で囲い、土を埋戻し、上部にコンクリート（厚さ：10 cm）を打設したもの

(2) 今年度の予定

<講演会等>

- ・水堀等に対する理解促進、文化財保護意識の向上を目的とした講演会等を検討
(名古屋城の水堀等の現況、他城郭の水堀等について)

<社会実験>

- ・舟運の計画(経路、所要時間、便数、船着場や舟の形状・規模等)の参考とするため、舟運の社会実験を実施

実施日数：3日間程度

内 容：運航経路からの眺望や見どころの検証、参加者への意見聴取などを行う

名古屋城水堀の概要

1 近世の水堀の状況

(1) 近世における水堀の変遷

・慶長 15 年(1610) 水堀の完成

名古屋城普請が始まり、この年堀・石垣が完成した。御深井丸西・北の水堀も当時完成したと思われる。ただし水堀の北岸のうち、東側は護岸がなされず、御蓮池と水面がつながっていた。東側の護岸については、明治 25 年(1892)頃北練兵場(現名城公園)ができた際、初めて護岸がなされたと考えられる。水源は雨水と熱田台地からの湧水のみで、辰ノ口のような排水施設はなかった。水堀が所定の水位になるには、数年を要したと思われる。

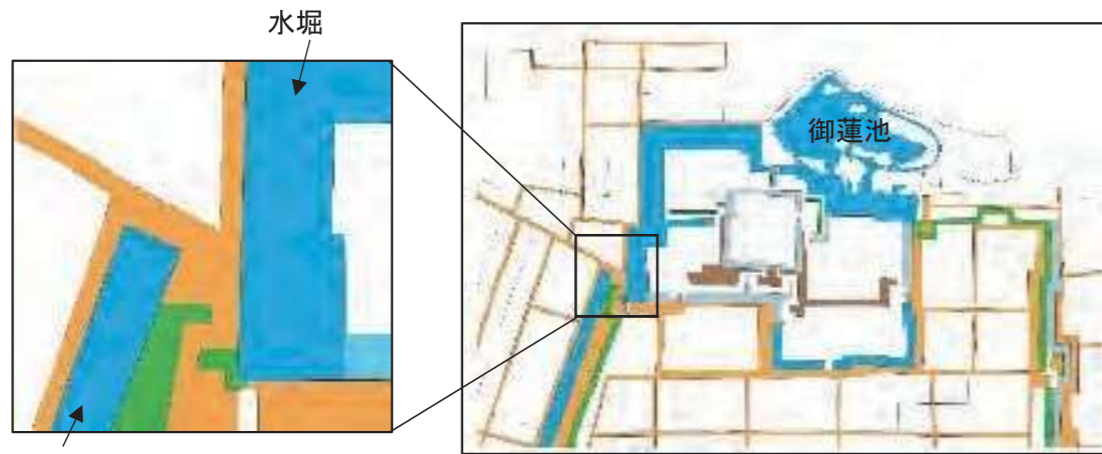


図 1 正保四年(1647) 名古屋城図 (徳川美術館蔵をトレース)

・寛文 3 年(1663) 辰之口の設置

名古屋城下には藩士の屋敷だけでなく、清州越により多くの商人・職人が移住した。江戸時代前期から城下町が拡大していき、熱田台地の地下水の利用が増えた。そのため台地からの湧水が減り、水堀や御蓮池の水が不足するようになった。この年、春日井郡川村(現守山区)から庄内川の水を御蓮池や水堀に引き入れるため御用水が引かれた。当初、御用水はいったん矢田川に流れ、取水していたが、延宝 4 年(1676)、矢田川の下をくぐる伏越となった。御用水により水堀の水不足は解消されたが、大雨などで水位が高くなり過ぎるのを防ぐため、排水施設が必要になっ

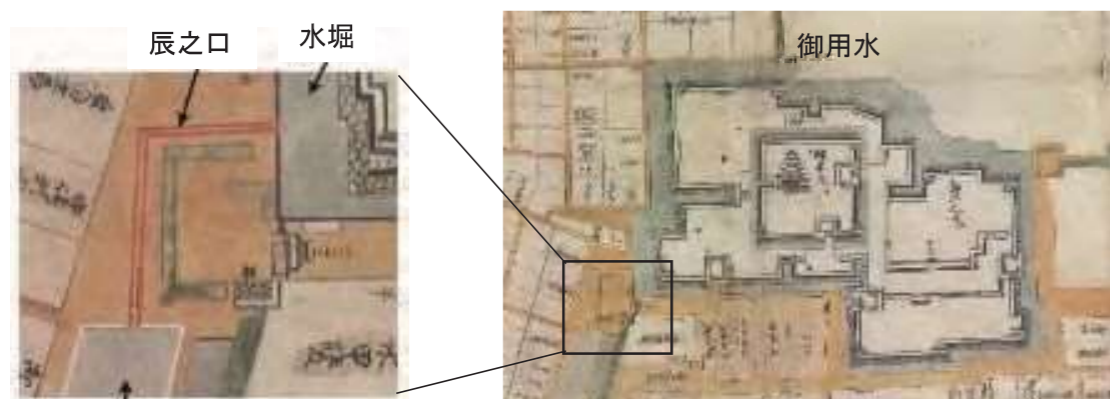


図 2 正徳 4 年(1714) 尾府名古屋図 (名古屋市蓬左文庫蔵)

た。これが辰之口である。辰之口の排水路はいったん西へ向かい、すぐに 90 度南に折れて堀川の北端につながった。

・天明 5 年(1785) 辰之口流路の変更

当時、熱田台地と矢田川の間には東から西へ大幸川が流れ、笈瀬川に接続していた。大幸川は大雨のたびに田畑にあふれていたため、天明 4 年に笈瀬川から切り離し、堀川に付け替える工事が始まった。この結果、大幸川は下御深井御庭(現名城公園)や西側水堀の少し西を通ることになった。このルートは明治になって堀川を延長したルートとほぼ重なる。辰ノ口の水路も 90 度南に折れる必要がなく、まっすぐ西に向かい、新しい大幸川に注ぐようになった。

なお、現在水堀の排水は水堀北西角の樋ノ口で行っている。



図 3 文政元年(1818) 名古屋城下図 (名古屋市博物館蔵)



図 4 『尾張名所図会』に描かれた辰之口

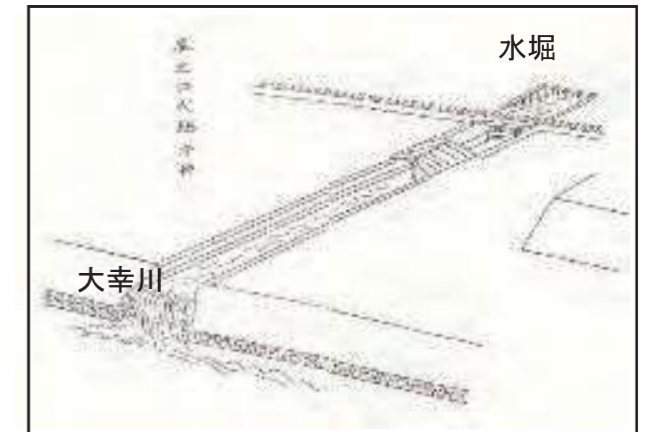


図 5 『金城温古録』に描かれた辰之口

(2) 船着場周辺の遺構

・辰之口水道大樋

船着き場設置予定地点西側に辰之口水道大樋の一部が残存する。

樋の構造は、『金城温古録』に「樋の両側、石組、底共に南蛮た々き」との記載があり、現存する遺構も樋の前面、側面は石組となっている。石組には切石が使用されているが、一部には割石

が使用されているため(図11)、樋の設置後に改修された可能性がある。ただし、その時期は不明である。石組の目地にモルタル等は視認できない。

底の「南蛮た々き」については人工地盤が設置され確認できないが、当時の施工写真にはたたきのような面が確認できる(図6)。平成10年の護岸施工時の資料を確認する限りではこのたたき面の取り壊しを行っていないことから、人工地盤下にたたき面が残されている可能性がある。

辰之口の規模は、「巾九尺、総長三十間五尺」とされ、幅については現存遺構の実測値(約2.62m)と類似する。総延長については、樋の東側が土囊で塞がれているため確認できない。現在目視で確認できるのは約6.5mである。

その他の構造物として、辰之口の水路を渡る石橋がある。石橋は、『尾張名所図会』、『金城温古録』に描かれているように(図4、5)、外堀から数m西方にあった。描かれた石橋の構造は、長方形の石材を並べ、支柱で支えたもので、現在も類似した構造の石橋が2基確認できる(図7、11)。ただし、東側の石橋はドリルによる穿孔痕が残るため、近・現代に設置された可能性がある。



図6 辰之口底のたたき面(平成10年撮影)



図7 辰之口の石橋(西側)

・外堀外縁の石垣

平成10年度に実施された辰之口南側の護岸工事以前、同地点には石垣が存在した(図8)。石垣の築石は方形が大半で、積み方は布積みに近い。その大半は平成10年の護岸工事の際に破壊されたが、辰之口南側より2.2mの範囲で一部が残存する(図9、図11)。これらの設置時期については、詳細な時期は不明である。

近世の水堀外縁部には、『尾張名所図会』に石垣状の構造物が確認されることから(図10)、石



図8 辰之口南側の石垣(平成10年撮影)

垣状の構造物が存在したと推測されるが、その規模、築造および廃絶の時期については不明である。



図9 現存する辰之口南側の石垣

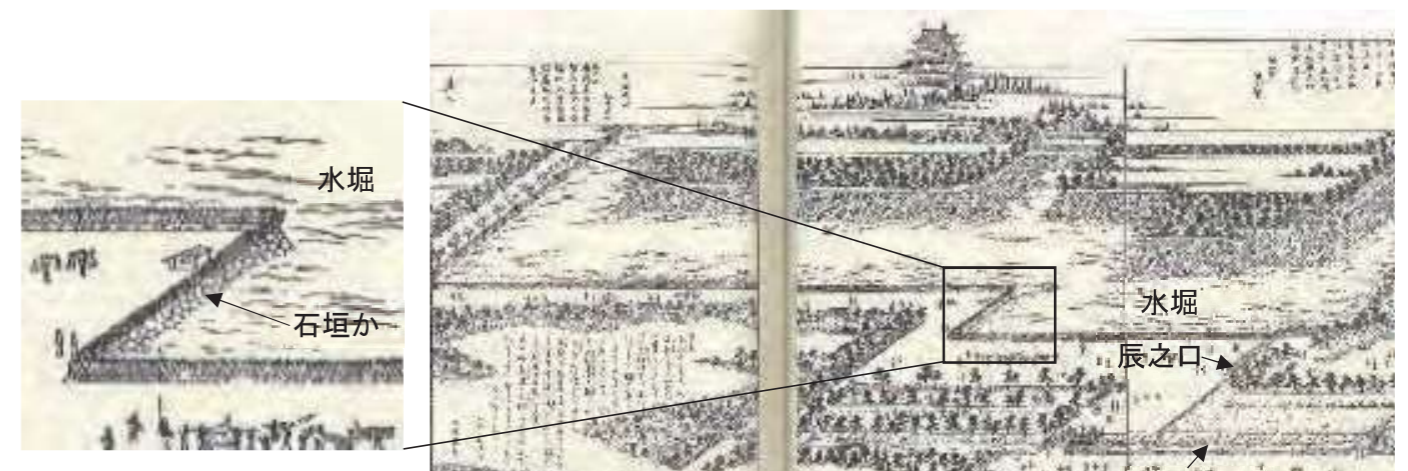


図10 『尾張名所図会』に描かれた外堀外縁の石垣

(3)名古屋城に存在した舟運施設

文献史料等に記された舟運に関する施設を下記に示した(図11)。出典はことわりのない限り『金城温古録』。

ア 南波渡場

本丸搦手馬出の東、二之丸埋門から降りた所にある波止場。幕末の写真では埋門の下に木製の大きな階段があった。常時船はつないでいなかったとあるが、写真では一艘の小舟が写っている。この波止場は、二之丸御殿に居住していた藩主および家族などが下御深井御庭に行く際に使用された。

イ 北波渡場

南波渡場の北、堀の対岸にある波止場で、南波渡場から下御深井御庭に行く舟の下船場。竹長押茶屋のすぐ南にあった。幕府の上使を下御深井御庭でもてなした際、飾り付けた御座船を係留したとある。明治20年代に水堀北岸の護岸工事が行われたため、遺構は残っていない。

ウ 御次波渡場

残された絵図・記録・写真から、水堀北岸、茅庵御門の東にあったと思われる。東北隅櫓の北側付近か。御次波渡場のすぐ西には御船番所や御船蔵があり、水運のセンター的な場所であった。御船番所には水主（かこ。舟の漕ぎ手）が常駐し、船蔵には普段は使用しない御座船や、堀の掃除や草刈をするための作業船が係留されていた。ここも、明治 20 年代に水堀北岸の護岸工事により遺構は残っていない。なお、藩主が茅庵へ御成の際「茅庵南波渡場」が利用されたとあるが、この御次波渡場との関係は不明、あるいは同一か。

エ 御船上場

『金城温古録』によれば、巾下門の北、辰の口の石橋から 21 間（約 40m）の場所にあったとあるが、幕末には跡形もなかった。もともとの利用形態は不明であるが、宝永 6 年（1709）4 代藩主徳川吉通が知多巡行の帰り、城に入るため水堀を舟で通ったとあるが、あるいはその際上船場として使用されたのであろうか。また初代義直が「巾下御堀」から乗船したとあるが、あるいはこの御船上場か。遺構は残っていない。

（4）名古屋城における舟運の事例

名古屋城水堀では、近世においてさまざまな舟運があり、これを日常的、臨時的、非常時に分類した。出典はことわりのない限り『金城温古録』。

ア 日常的な舟運

- ・藩主が下御深井御庭で遊ぶため
10 代藩主徳川斉朝はひんぱんに下御深井御庭に行き、水鳥の狩猟などを楽しんだ。時には藩主の家族や女中も下御深井御庭に出かけることがあった。その際南波渡場～北波渡場を使用した。
- ・見廻り
朝・昼・夜の 1 日 3 回、役人が舟で堀内を見回った。
- ・掃除・草刈り
堀の掃除や、堀岸に生える葦や薄などを刈り取るため、役人が舟を使用した。

イ 臨時的な舟運

- ・東福門院院使の接待
初代藩主徳川義直の時代、東福門院（御水尾天皇の中宮、将軍秀忠の娘）の院使が江戸へ下った時、水堀に津島祭礼の山船を模した舟を浮かべてもてなした。院使や藩主の家族は二之丸の堀際にある迎涼閣や竹楼で見学した。
- ・上使の接待
幕府の上使が名古屋城に来た際、上使をもてなすために御座船に乗せ、下御深井御庭の御茶屋まで招き入れた。
- ・徳川吉通が帰城で利用
宝永 6 年（1709）9 月 26 日、知多巡行を終えた 4 代藩主徳川吉通は本町筋を北上し、京町筋を西に向かった。御園御門の外を通りすぎ、巾下で舟に乗って城に帰った。舟に乗ったのは御船上場、降りたのは南波渡場であろうか。通常、藩主一行は、本町筋からは本町御門を入り、二之丸大手門から二之丸御殿に入るとされる（図 12）

ウ 非常時の舟運

- ・火災時の避難
万一城内で火災が発生するか、火事が城内に迫った際、藩主や家族たちが南波渡場から北波渡場経由で下御深井御庭まで避難することになっていた。舟は一艘 10 人まで、人と道具といっしょに乗ってはいけない、などの決まりがあった。
- ・藩主が城を脱出
御土居下同心の口伝によれば、敵軍が名古屋城に迫った場合、藩主は埋門～南波渡場～北波渡場経由で城を脱出し、同心たちの警護により木曾方面まで落ち延びる手はずである、という。

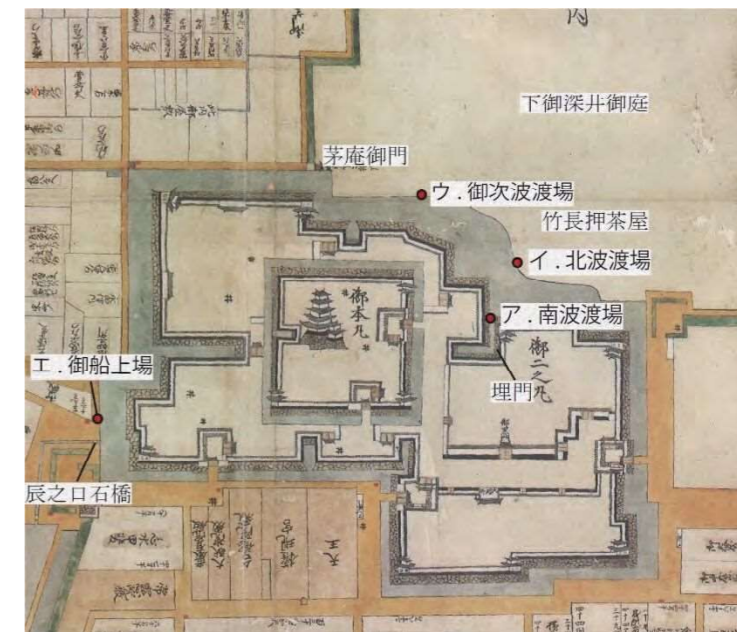


図 11 舟運施設位置図(『尾府名古屋図』(名古屋市蓬左文庫蔵)に一部加筆)



図 12 宝永 6 年(1709)徳川吉通の帰城ルート(『尾府名古屋図』(名古屋市蓬左文庫蔵)に一部加筆)

特別史跡名古屋城跡内での石垣カルテ作成について

1 石垣カルテの調査について

(1) 石垣カルテ調査の進捗状況

名古屋城総合事務所では、石垣の現状を把握するため、平成 29 年度(2017 年)より天守台周辺石垣を除く城内すべての石垣を対象に石垣カルテ作成を実施してきた。今年度は 7 年目にあたり、城内の主要な石垣の調査は既に完了している。来年度以降は三之丸、二之丸外堀の一部、各所の雁木、階段等の調査を行い、令和 7 年度(2025 年)には全石垣の調査が完了する予定である。

表 1 石垣カルテ作成進捗状況

	オルソ作成(m ²)	カルテ作成(m ²)	調査位置
平成29年度	40418	4478	オルソ：本丸、西之丸、御深井丸、二之丸 カルテ：正門付近、表二之門付近、東二之門付近
平成30年度	6880	3309	オルソ：二之丸外堀 カルテ：二之丸東門付近、二之丸大手二之門付近
令和元年度	3452	5424	オルソ：二之丸外堀付近 カルテ：本丸内堀付近
令和2年度	675	9654	オルソ：二之丸外堀、城内雁木、階段 カルテ：御深井丸外堀、西之丸外堀等
令和3年度	-	7411	オルソ：実施せず カルテ：西之丸外堀、御深井丸外堀
令和4年度	-	11185	オルソ：実施せず カルテ：二之丸外堀、西之丸外堀、御深井外堀
令和5年度	-	6907	オルソ：実施せず カルテ：二之丸外堀
令和6年度	4730	2197	オルソ：水堀外側、三之丸 カルテ：二之丸外堀、二之丸庭園付近
令和7年度		4730	オルソ；実施せず(調査完了のため) カルテ：三之丸

(2) 石垣カルテ作成に伴う石垣の現況調査について

石垣カルテの作成により現時点で確認された石垣の状況について一例を示す。

ア. 個別石材の変状

(ア). 局所的な間詰石の抜け(127H)

数点の間詰石が局所的に抜け落ちる状況。

(イ). 石材の割れ、欠け(022H)

隅角石の角に割れ目が生じ、一部は欠けている状況。

(ウ). 石材表面の剥離(本丸 041H 石垣)

名古屋空襲時の被熱により、石垣面全体に石材の割れ、剥離が見られる。割れ、剥離の大半は石垣表面に留まるが、周辺を通行する観覧者への影響、石材表面の刻印等が滅失する恐れがある。

イ. 石垣面の変状

(ア). 面的な間詰石の抜け(西之丸 262W 石垣)

石垣面の目地が開くことによって間詰石が広範に抜け落ちている。

(イ). 石垣面上部～中部での膨らみ(本丸 027H 石垣)

石垣左側において石垣上部～中部に膨らみが見られ、これにより石垣全体の勾配が不安定になっている。

(ウ). 石垣面下部での膨らみ(本丸 022H 石垣)

石垣下部が面的に膨らむ。石垣中央より右側の石樋付近では膨らみが著しく、膨らみによる石材の飛出しもみられる。

(エ). 石垣面全体の変形、天端石のズレ(御深井丸 2480 石垣)

石垣上の樹木の根により石垣が全面的に膨らみ、それに伴い石材が飛び出している。石垣上部では天端石のずれもみられる。

ウ. 後世の改変による変状

(ア). 後世の積み直しによる改変(2240 石垣)

昭和 45 年(1970 年)、豪雨による石垣崩落を受け、被災か所を積み直した。積み直し箇所は当初の石垣に対しセットバックし、石材も一部新補石材に入れ替えられており、築城時の姿が失われている。

(イ). 後世の造成により撤去された石垣

築城時二之丸東側には枳形を構成する石垣が存在したが、昭和 38 年(1963 年)の愛知県体育館建設に伴い築石面が撤去され、築城期の姿が失われている。

2 石垣の保存方針の策定について

(1) 保存方針策定の趣旨

本市では『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』を策定し、特別史跡の保存、活用、整備を進めてきた。石垣については、石垣カルテの成果を踏まえて石垣の保全方針を定め、これをもとに石垣の維持保全、修復整備の方法、計画等の検討を行うこととしている。上記に例示したような石垣の現況を踏まえ、石垣の保存方針を定めるものである。

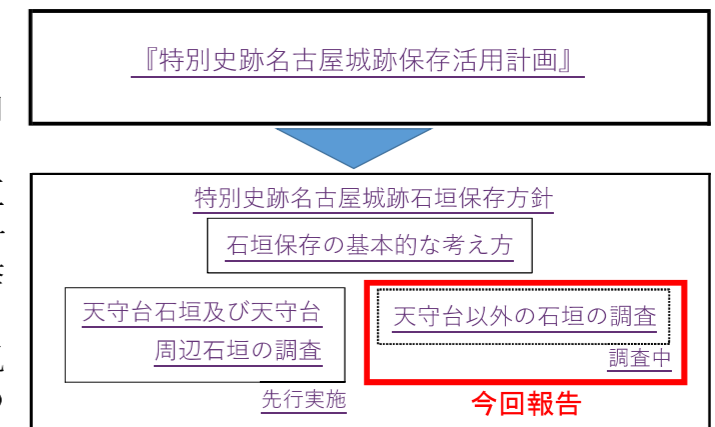


図 1 石垣保存方針と城内石垣カルテの位置づけ

(2) 保存方針の基本的な考え方

方針の基本的な考え方は、天守台石垣の保存方針に則る。ただし、石垣の現状に合わせ保存、整備の方法等は個別に検討する。

以下に参考として、『天守台石垣の保存方針関連資料』（第 56 回石垣・埋蔵文化財部会で配布）より抜粋し掲載する。

〈参考〉

(特別史跡の本質的価値を構成する石垣)

・現存遺構から往時の縄張りや近世城郭完成期の姿を知ることが本質的価値の一つとする特別史跡名古屋城跡において、近世期から残存する石垣は、その現状を維持するよう厳格な保存管理を行う

(保存管理)

・現存する石垣を保存するため、日常的な観察及び維持管理行為を行うことにより、適切に管理する。

(復旧(修理))

・近代以降に撤去や改変された石垣は、本来の姿を回復するために積み直しをはじめとする修復歴について検討し、個別事例ごとに判断する。

・変形、変状など石垣面の文化財的な価値を損なう危険性が生じた場合や、来場者の安全に影響を与える可能性が生じた場合には、適切な方法で復旧(修理)を行う。

(来場者等の安全確保)

・石垣の保存整備に際しては、石垣の文化財的価値と、来場者の安全確保の両立を図る。

(石垣の活用)

・公儀普請によって築かれた名古屋城最大の特徴を示す石垣の眺望確保、以降の顕在化を図る。

・石垣の適切な管理のため、調査研究を継続的に積み重ねるとともに、そのちょうさせいかをもとに、広く教育普及活動を行い、市民に石垣の保存に意識を醸成する。

(3) 方針策定に向けてのスケジュール

保存方針策定のため、昨年度より石垣カルテのまとめ作業、石垣の再調査を実施してきた。本年度も引き続き石垣の再調査を行ったほか、過去の改変状況の精査、現況の整理等を行っている。来年度は、各石垣の状況に沿った各保存方針を定める予定。

表 2 石垣事例現況一覧

石垣の状況		石垣番号	石材のズレ・抜け	石材の割れ、剥離	石垣面の変形	改変・積み直し履歴
変状範囲	細目					
個別石材の変状	ア-(ア)	127H	石垣中、下段部分で間詰石の抜けが見られる	なし	石垣下部にわずかな膨らみ	なし
個別石材/石垣面の変状	ア-(イ) イ-(ウ)	022H	間詰石の抜けが見られる	隅角石に割れ、剥離がみられる	石垣下部の膨らみが全面的にみられ、局所的に大きく膨らむ箇所も確認される。	なし
個別石材の変状	ア-(ウ)	041H	なし	御殿焼失時の被熱による割れが全面的にみられる	なし	濃尾地震後に修理。
石垣面の変状	イ-(ア)	262W	石垣下部で間詰石の抜けが目立つ	なし	隅角部と築石部の間で目地が開いている。	石垣上部が谷積みとなる(改変時期不明)
	イ-(イ)	027H	間詰石の抜けが見られる	なし	石垣西側で大きな膨らみがみられる	石垣西側が谷積みとなる(改変時期不明)
	イ-(エ)	2480	全面的に間詰石の抜けが目立つ 樹木の根により天端石のズレが目立つ。	なし	樹木の根により石垣面が大きく盛り上がる。	間詰部分にモルタルによる補修の痕跡あり(補修時期不明)。
後世の改変による変状	ウ-(ア)	2240	戦後の積み直し範囲外で間詰石の抜けが見られる	隅角石に割れ、剥離がみられる	戦後の積み直し箇所が当初石垣に対しセットバックしており、境目に段差が生じている。	石垣中央で谷積み状となる箇所あり(改変時期不明)。 石垣西側は昭和45年～47年に積み直し。
	ウ-(イ)	201N	隅角部と築石部の間に若干の隙間が見られる。	なし	なし	昭和38年に築石面を撤去、現在の位置までセットバック。

石垣カルテ実施状況



図2 石垣カルテ進捗状況（三之丸除く）

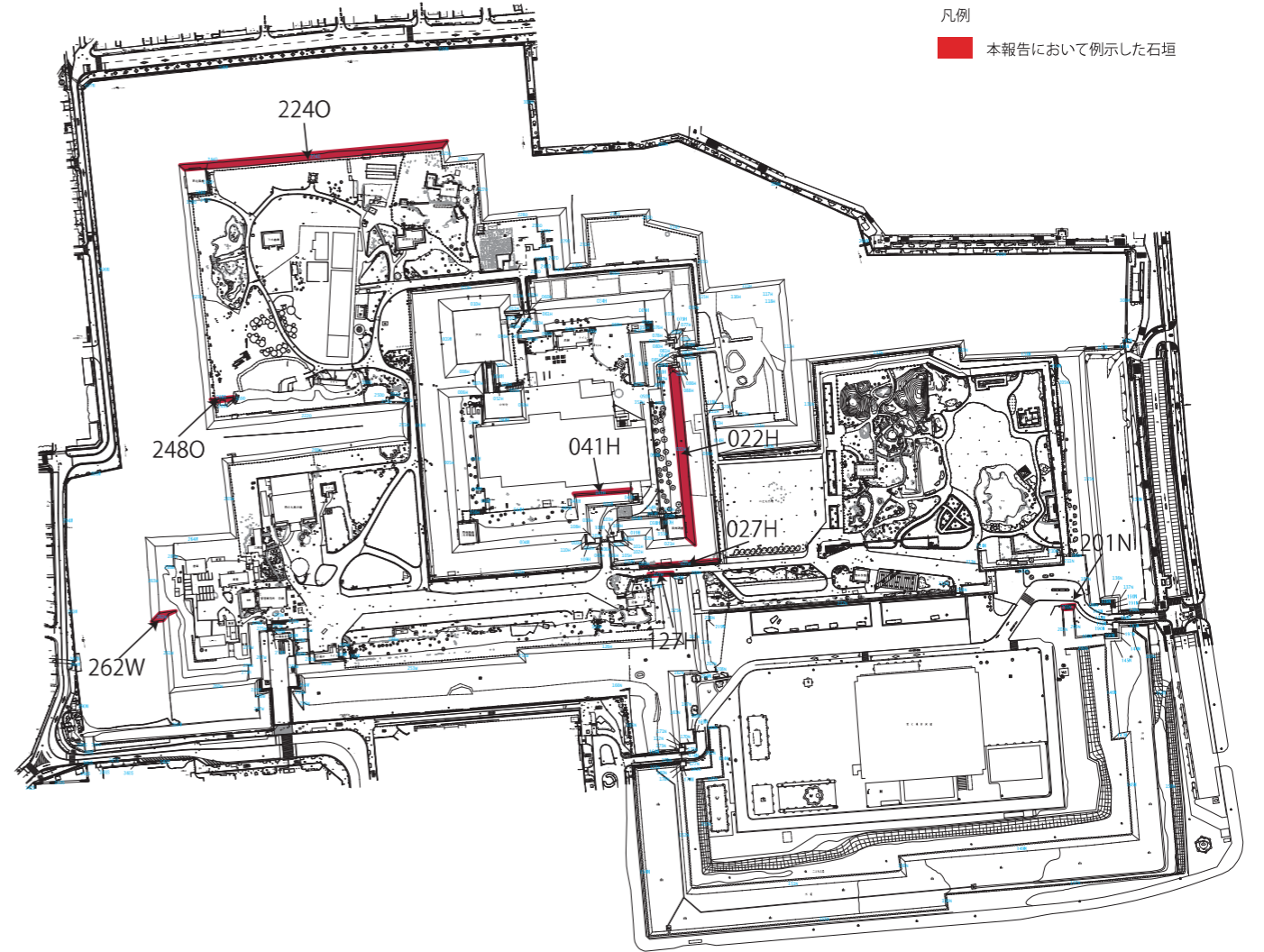


図4 本報告で例示した石垣位置図

石垣カルテ実施状況(三之丸)

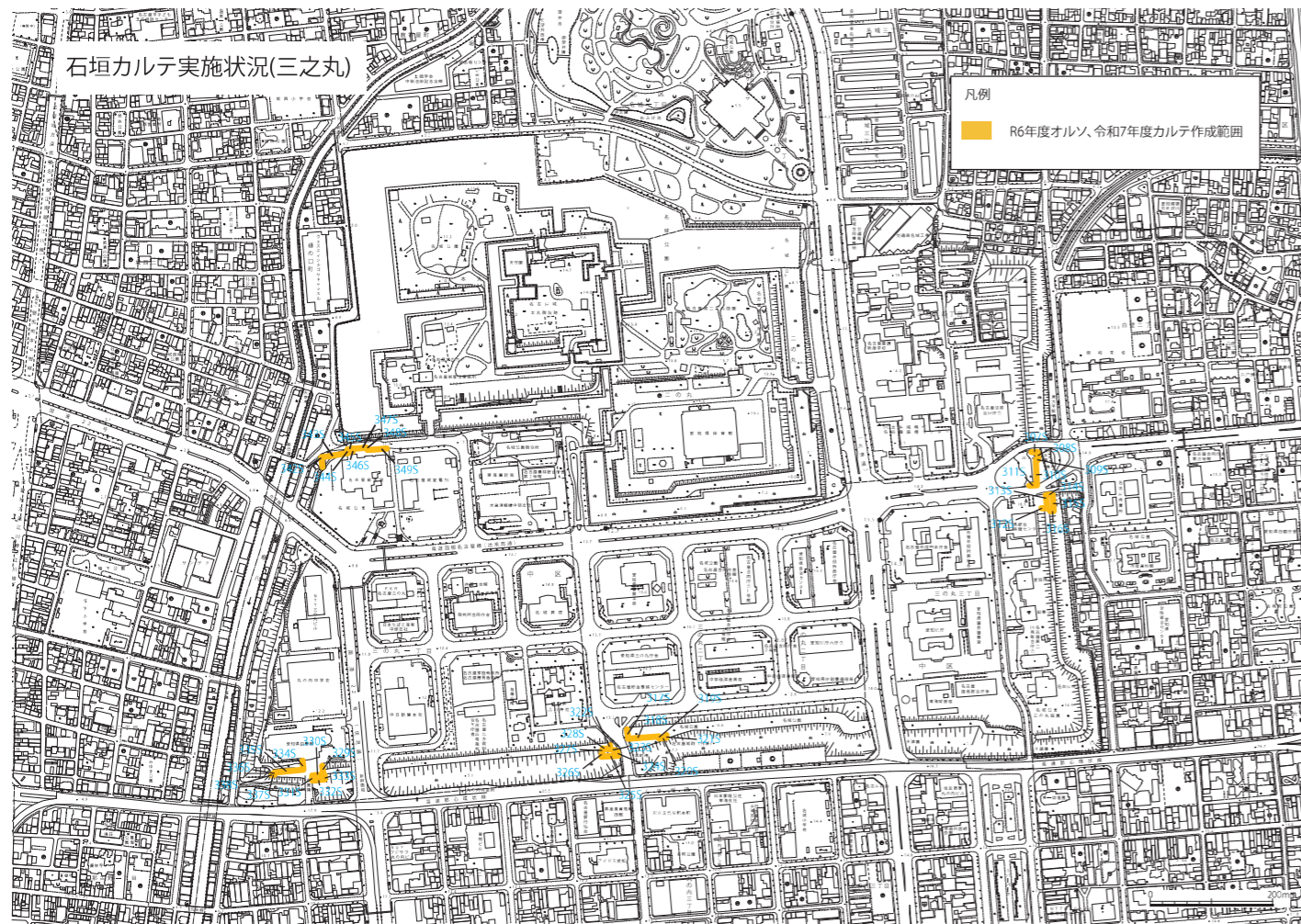


図3 石垣カルテ進捗状況（三之丸）

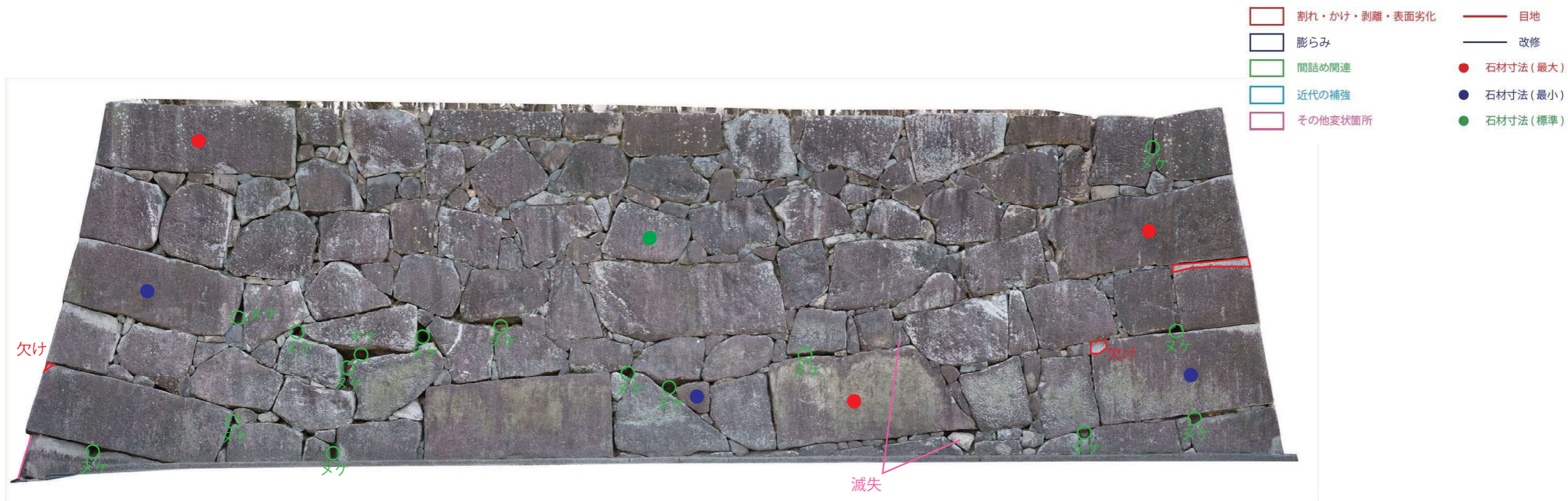











図5 ア-(ア)局所的な間詰石の抜け(本丸127H石垣)

- | | | | |
|---|---------------|---|----------|
|  | 割れ・かけ・剥離・表面劣化 |  | 目地 |
|  | 膨らみ |  | 改修 |
|  | 間詰め関連 |  | 石材寸法(最大) |
|  | 近代の補強 |  | 石材寸法(最小) |
|  | その他変状箇所 |  | 石材寸法(標準) |

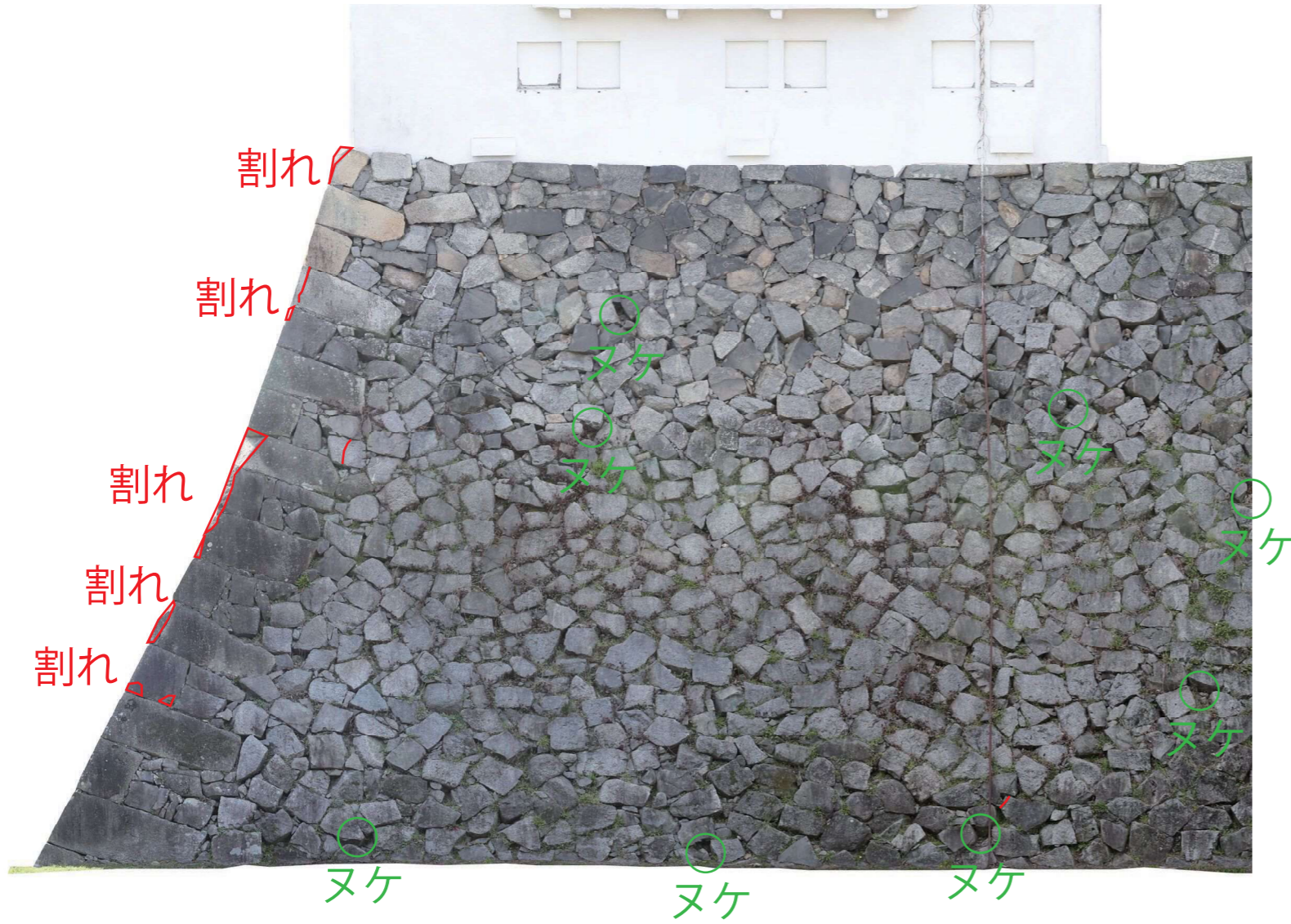
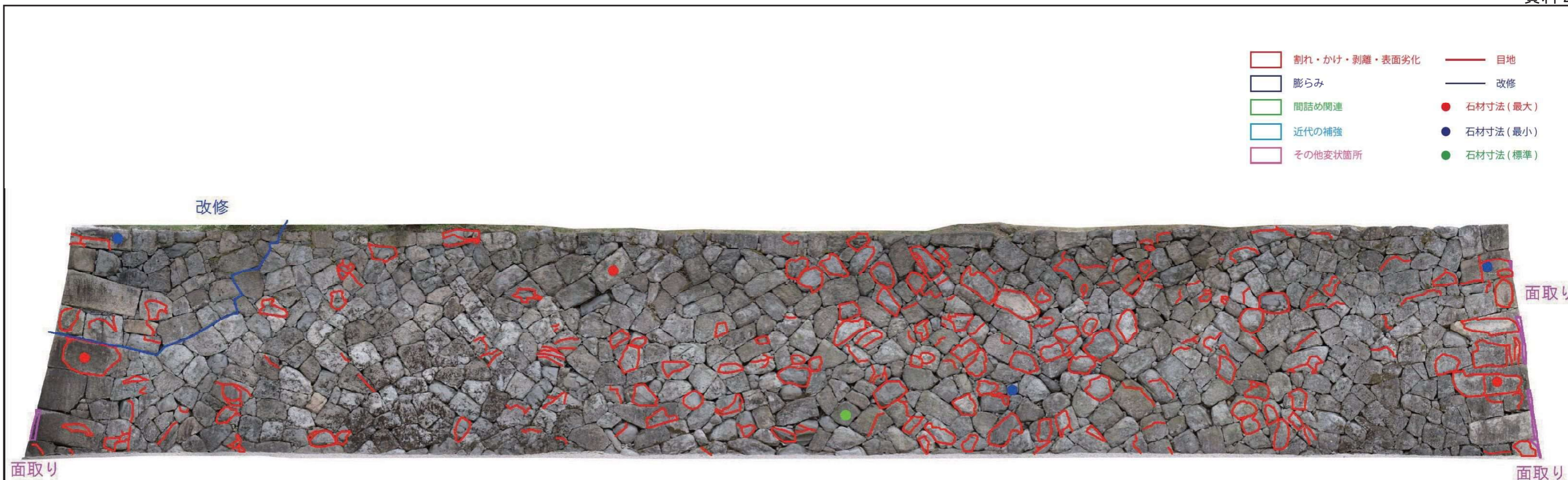


図6 ア-(イ) 石材の割れ、欠け(本丸 022H 石垣)



※全体に割れ・被熱割れ・かけ・剥離



図7 ア-(ウ) 石材表面の剥離(本丸041H石垣)

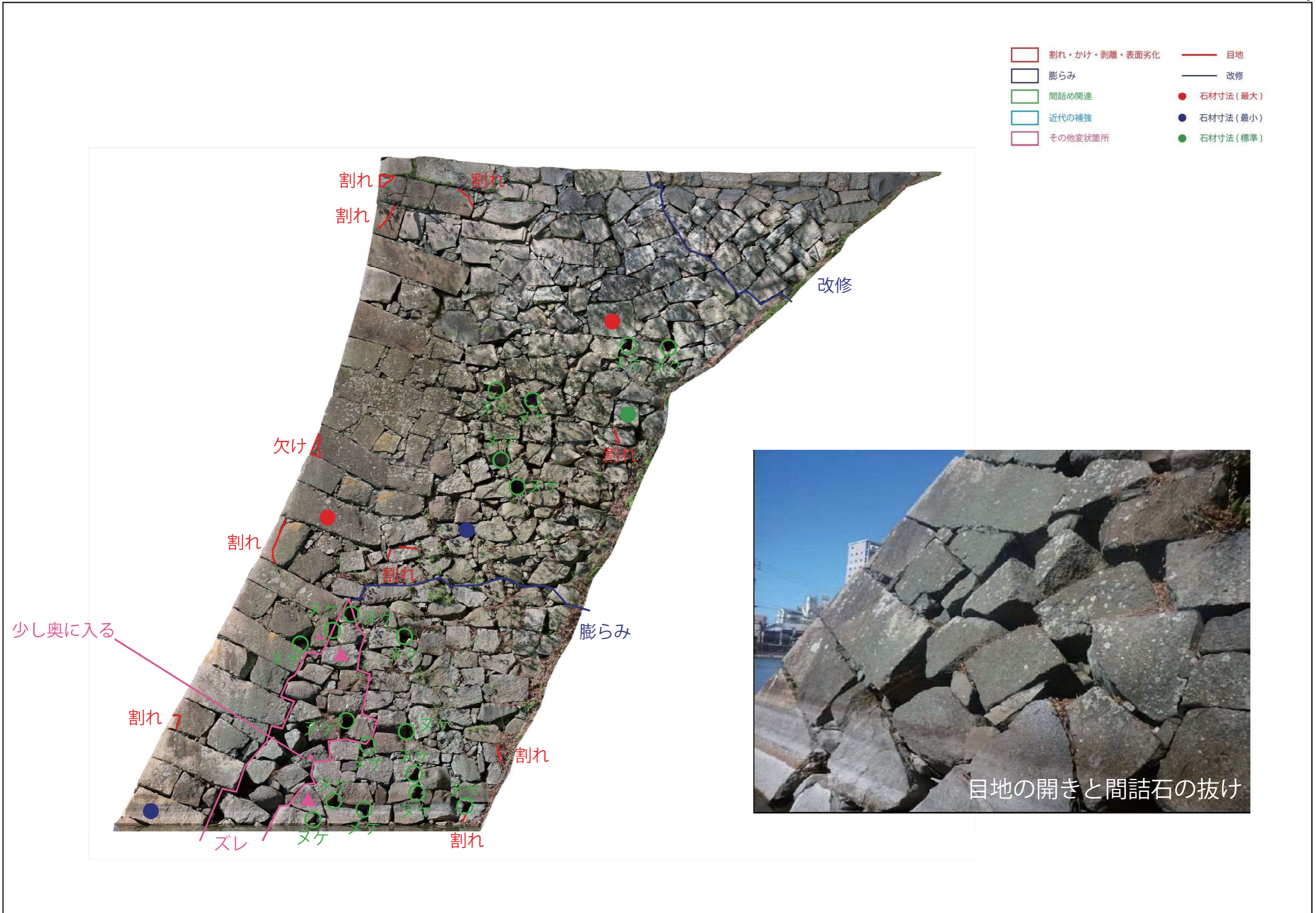








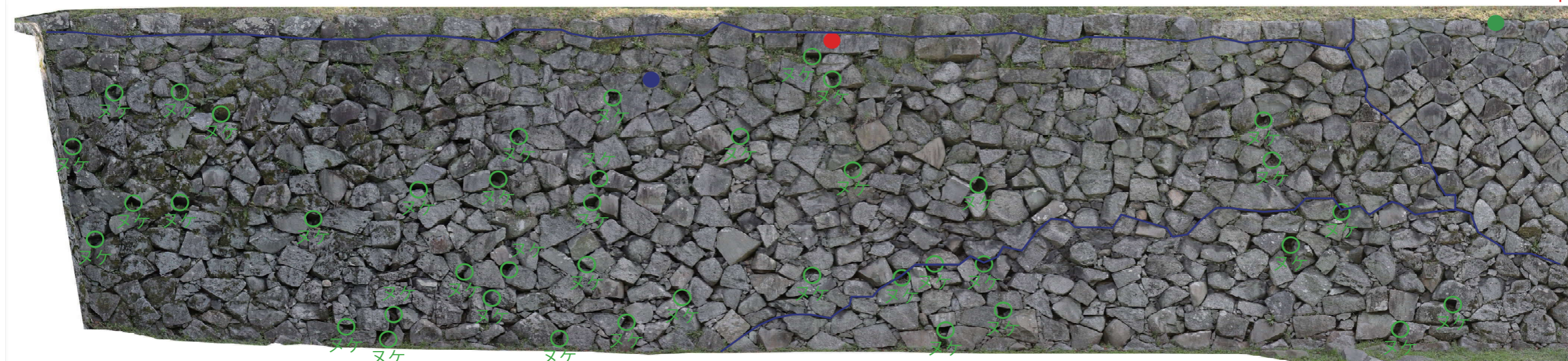


図8 イ-(ア) 面的な間詰石の抜け (西之丸 262W 石垣)

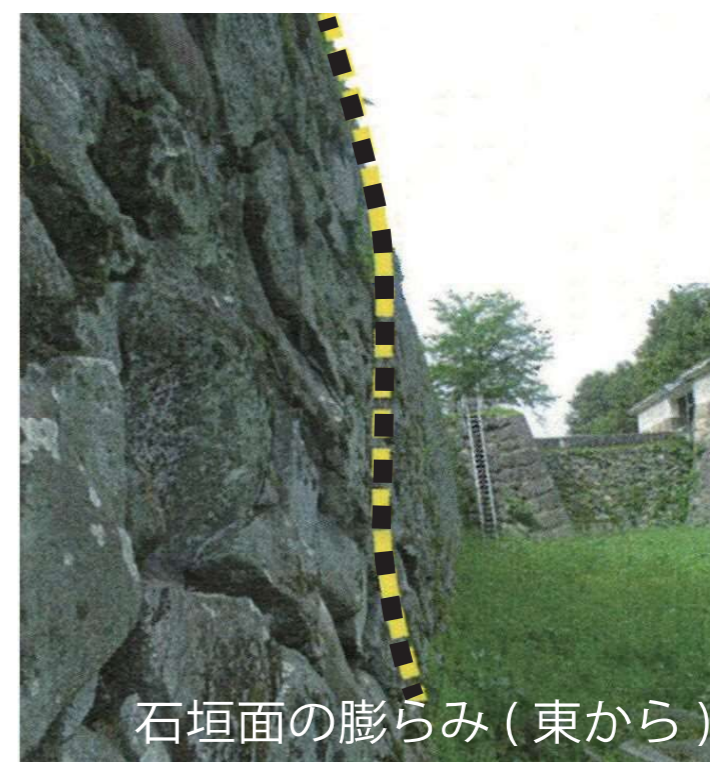
- | | | | |
|---|---------------|---|----------|
|  | 割れ・かけ・剥離・表面劣化 |  | 目地 |
|  | 膨らみ |  | 改修 |
|  | 間詰め関連 |  | 石材寸法(最大) |
|  | 近代の補強 |  | 石材寸法(最小) |
|  | その他変状箇所 |  | 石材寸法(標準) |



全体に膨らみ



石垣面の膨らみ(西から)



石垣面の膨らみ(東から)

図9 イ-(イ) 石垣上部～中部での膨らみ(本丸027H石垣)

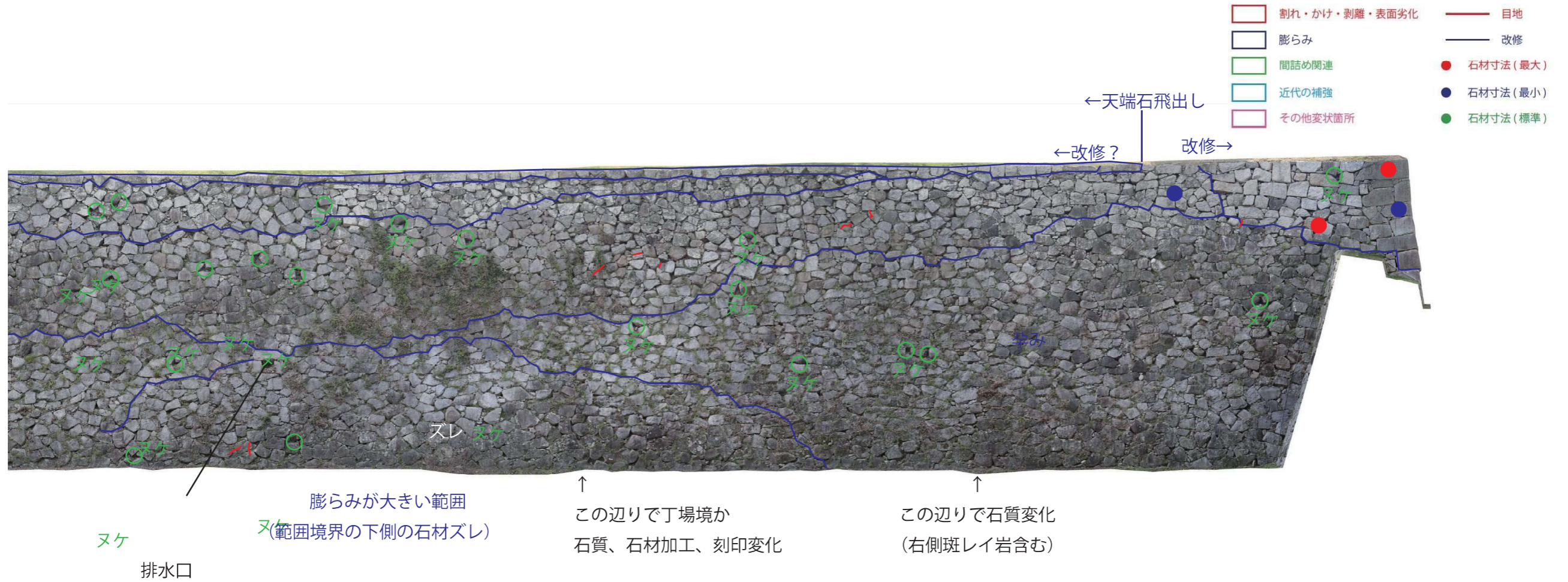


図 10 イ-(ウ) 石垣下部での膨らみ(本丸 022H 石垣)



図 11 イ-(エ) 石垣全面での膨らみ (御深井丸 2480 石垣)



図 12 ウ-(ア) 後世の造作による石垣面の変状 (御深井丸 2240 石垣)



図 13 ウ-(イ) 後世の造作による石垣面の改変(二之丸 201N 石垣)

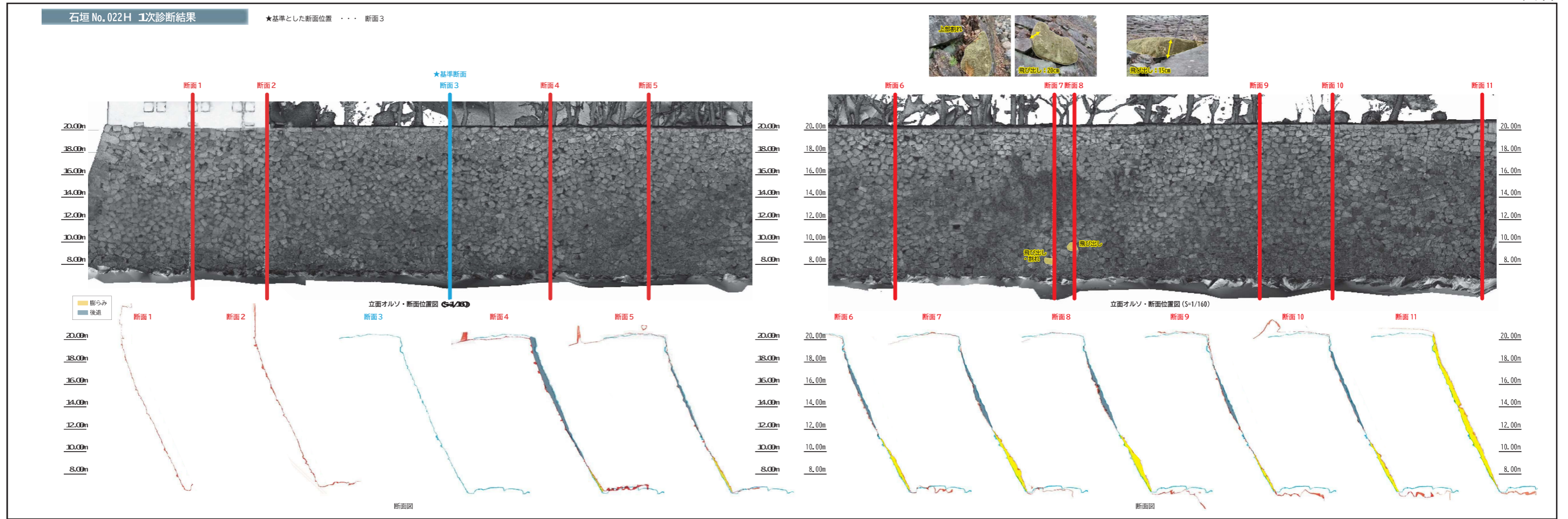


図 14 027H 石垣断面図【参考】

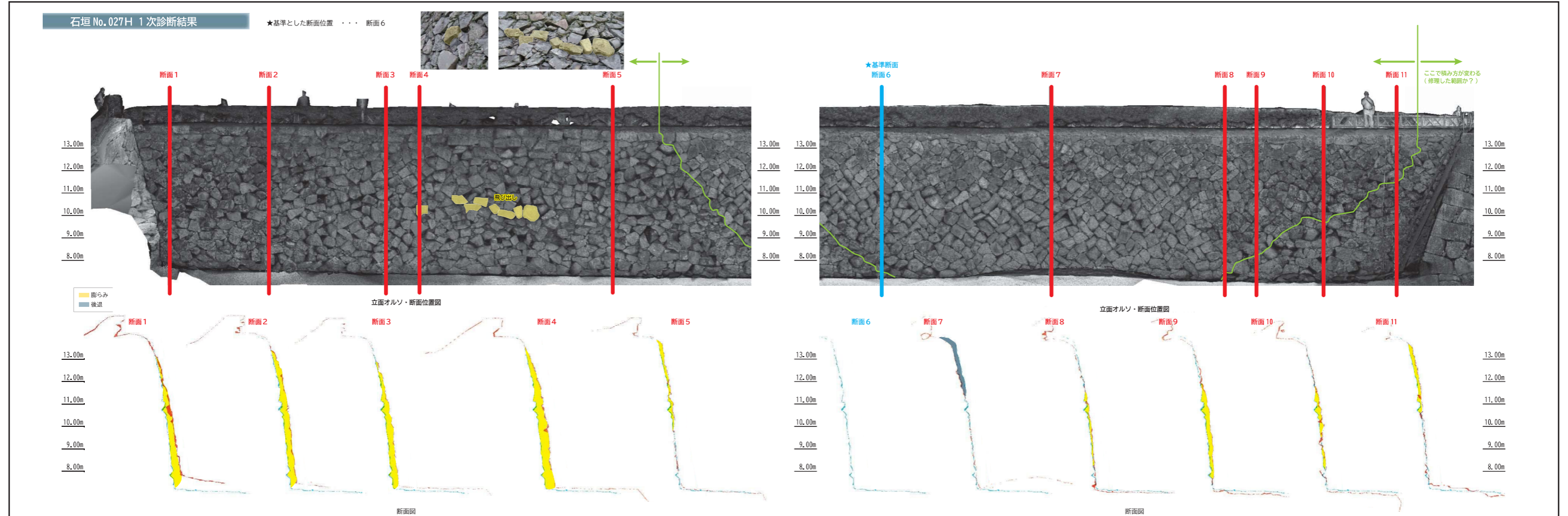


図 15 022H 石垣断面図【参考】

名古屋城石垣基本調査(石垣カルテ)										
地区名		石垣番号		石垣部位		石垣面の方位				
立地面			立地地盤		管理環境					
所有者		管理者		関係法令		利用形態				
現在の利用状況				築造時期						
沿革				修復履歴						
絵図・古文書	-									
丁場割図における普請担当大名				既往の発掘調査・研究						
延長	天端			裾部						
高さ	左端部		中央部		右端部					
	石垣高に1m以上の差がある場合									
	①	-	②	-	③	-	④	-	⑤	-
立面積	変形の観測 (モニタリングの方法)									
変状の程度										
破損要因 特記事項										
備考										
位置図										

名古屋城石垣基本調査(石垣カルテ)										
隅角	左					右				
隅角部	0									
平面形状										
稜線	段数					段数				
	勾配					勾配				
	反り					反り				
気負い										
積み方	技法					技法				
	角脇石の個数					角脇石の個数				
はさみ石 間詰石										
石材加工	角石					角石				
	角脇石					角脇石				
石材寸法 控え長	最小					最小				
	最大					最大				
石材形状 規格性										
加工痕跡等										
石質										
石材の 石質比率										
刻印の状況										
矢穴の状況										
植物										
近代以降の付加物 (モルタル・鉄筋など)										
観察事項 (角石の形態・角脇石の状態など)										
隅角部 破損状況										
	剥離	ヒビ	割れ	孕み	ズレ	抜け	歪み	その他の状況		
天端										
中段										
裾部										
観察事項										

名古屋城石垣基本調査(石垣カルテ)										
築石部	0									
平面形状										
立面形状	勾配	左端部		中央部		右端部				
		標準的な勾配と異なる場合								
	反り	①		②		③		④		⑤
排水口・出水口の有無										
積み方										
間詰石										
石材加工										
石材寸法	最小			最大			標準			
石材形状 規格性										
石材種別										
加工痕跡など										
石質										
石材の 石質比率										
刻印の状況										
矢穴の状況										
植物										
近代以降の付加物 (モルタル・鉄筋など)										
観察事項 (築石の形態・状態など)										
築石部 破損状況										
	剥離	ヒビ	割れ	孕み	ズレ	抜け	歪み	その他の状況		
天端										
中段										
裾部										
観察事項										

図 16 石垣カルテ調査項目【参考】